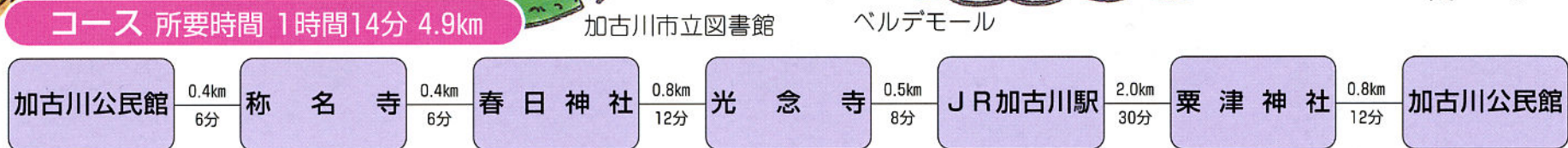


歩いてまわれるコースで名所旧跡を紹介する散策シリーズ。

加古川周辺は、旧街道の歴史を感じる町並みや現代的な感覚の駅前広場、ベルデモールなど…。人・まち・歴史と表情豊かな「加古川町散策コース」。

加古川再発見に、さあ、出発！

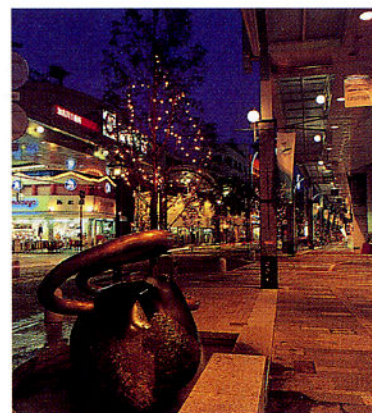


加古川町 散策



加古川駅前周辺は“加古川の顔”として、経済、行政、文化の中心であり、東播磨地域の玄関として発展しつつあります。その駅前広場（時計台、樹木、シンボルタワー）や周辺の道路などをイルミネーションで飾る“かこがわりパーファンタジー”が加古川の冬の風物詩として市民に親しまれています。

かこがわりバー・ファンタジー



ベルデモール

JR加古川駅南側の商店街で直線的な図形を組み合わせた石畳が現代的な感覚を見せ街灯は優雅な風情です。ケヤキ・モミ・ハナミズキなどの木立が木陰を作りしやれたゲート・アーケード・清流を持った加古川の表玄関です。

胴切れの地蔵さん

平野に胴切れの地蔵さんと呼ばれる胴体が二つに切れた石の地蔵さんがいます。この地蔵さんの前の道は旧山陽道で諸国の大名が参勤交代でよく往来していました。ある時、1人の男が殿様の行列の前を横切ってしまう、供侍の無礼打にあいました。しばらくして気がつくと、どこも異常ありませんでした。そこで、いつも信仰している地蔵さんに報告に行くと地蔵さんの胴がまっ二つに裂けているではありませんか。以来、土地の人々はこの地蔵さんを胴切れの地蔵さんと呼び深く信仰するようになったということです。



西国街道のにぎわいを今に伝える竜山石でできた立派な道標です。明治21年山陽鉄道が開通した時、加古川駅前に立てられたものと考えられます。



加古川宿の陣屋

(市指定文化財)

江戸時代(1705年)、姫路藩の役所として建てられたと伝えられています。木造平屋の建造物で旧山陽道の加古川宿の面影を残す唯一の建物です。



文楽三絃名人

豊澤団平



(豊澤団平の菩提所常徳寺)

豊澤団平は、加古川町寺家町に生まれました。幼い頃から三味線を習い文楽の道に入り、明治中頃に浄瑠璃界で紋下格となりました。妻の千賀女が作詩し、団平が作曲した代表作「壺坂霊験記」等を弾き、一世を風靡しました。『夢が浮世か 浮世が夢か... たとえ火の中 水の底... 妻は夫をいたわりつ 夫は妻を慕いつつ』

光念寺



本堂前に、与謝蕪村と並ぶ芭蕉中興六家の俳人“松岡青蘿”の句碑があります。

青蘿は、姫路藩士でしたが若い時に罪を得て国を追われ、諸国を遍歴して播州の加古川にやってきました。それから、青蘿は寺家町の栗本庵に住んで俳諧師として全国的にも教えあげられる人となり一門を繁栄させました。

『舟ばたや 履ぬぎすつる 水の月』

称名寺



この付近一帯は、加古川城址でした。昔、羽柴秀吉がこの地へ立ち寄った時、当時の城主加須屋助左衛門は秀吉につき、小姓頭となり、賤ヶ嶽一番槍に武功をあげました。境内にあるいちょうの大木は昔から加古川の目印でした。